

# 卒業年度の学生を対象とした兵庫教育大学教員養成スタンダードに関する意識調査

## A Survey of Standards for the Teacher Training in Hyogo University of Teacher Education: Opinions among Students in the Year of Graduation

田中圭介\* 別惣淳二\*\* 濱中裕明\*\*\* 吉本剛典\*\*\*  
TANAKA Keisuke BESSO Junji HAMANAKA Hiroaki YOSHIMOTO Takafumi

本研究では、兵庫教育大学の卒業を控えた学生に対して、彼／彼女らが4年間経験した、教員養成スタンダードに基づく教育体制に関するアンケート調査を実施した。本稿の目的は、アンケート調査の結果を分析することで、兵庫教育大学の教員養成スタンダードの運用、ひいては本邦の教員養成スタンダードの運用について考察することである。アンケート調査の分析の結果、教員養成スタンダードを用いた取組そのもの（自己評価、グループ討論）については自己省察、課題の明確化、自己の成長の確認といった効果が得られている反面、教員養成スタンダードの運用を補助する仕組み[eポートフォリオやカリキュラムマップ、TSS (Teacher's Standard-based Score)]については十分な効果が得られていないことが示唆された。これらの結果の考察を通して、今後、教員養成スタンダードやeポートフォリオを効果的に活用するための課題と展望を述べる。

キーワード：教員養成スタンダード、eポートフォリオ、意識調査

### 問題と目的

本邦では、1997（平成9）年7月の教育職員養成審議会第一次答申において、教科指導、生徒指導等に関する『最小限必要な資質能力』について言及されて以来、大学教育で養成される教員（教師）の質保証への取組が、社会的あるいは制度的に要請されるようになって久しい。教員養成の質保証への社会的、制度的要請が高まる中で、各課程認定大学では養成すべき教師像や専門性を基準として示し、その基準達成に向けて全学的な指導体制を構築することが重要な課題となってきた（別惣, 2012; 中央教育審議会, 2005）。この流れを受けて、各大学で教員養成に関わる「教員養成スタンダード」の策定と運用が進められてきた。

兵庫教育大学では、2011（平成23）年に、「教員を目指す学生が大学卒業時までに身に付けておくべき最小限必要な資質能力を示したもの」として、兵庫教育大学教員養成スタンダードを開発し、その試行的な運用に取り組んできた（別惣, 2012）。兵庫教育大学の教員養成スタンダードは、50項目の質問項目からなり、「学び続ける教師」「教師としての基本的素養」「子ども理解に基づく学級経営・生徒指導」「教科等の指導」「協働・連携」の5つの領域を測定するものである。兵庫教育大学では、教員養成スタンダードを手がかりに課題を発見し、目標設定を行った上で、②授業や課外活動に臨み、③成果等を蓄積し、④教員養成スタンダードと照らし合わせて振り返りを行うという学習のサイクルの下、指導を行っている（図1）。これらは全て、CanPassノートと呼ばれるeポートフォリオシステム上で行われ、情報の一元化

が図られている。

兵庫教育大学では、教員養成スタンダードを効果的に運用するために、主に以下の4つの取組が実施されてきた。第一に、教員養成スタンダードを用いた自己評価を学年毎に行う機会を設けることである（すなわち、学修成果シートの作成）。第二に、CanPassノートを用いて自身の学びの記録や成果物を蓄積するように促し、自己評価の際に活用させることである（すなわち、活動記録の作成）第三に、学修成果シートを用いて、発表やグループ討論を行い、省察を深める機会を設けることである（すなわち、リフレクションミーティングの開催）。第四に、目標設定や授業選択の基準として、教員養成スタンダードと各授業科目との関連を示した「カリキュラムマップ」や、カリキュラムマップに基づき各授業科目の成績から導かれた教員養成スタンダードに関するスコア（TSS: Teacher's Standard-based Score）を設定することである。具体的な4年間の指導計画としては、学生は1年次では7月に、2、3、4年次では4月に実施されるクラスミーティングにおいて、年度の目標やめざす教師像をCanPassノートに記入するように指導される。また、学修成果シートの作成やリフレクションミーティングを実施する期間としてリフレクションウィークと呼ばれる期間が年度ごとに設定されており、この期間を利用して1年間の学修を振り返ることが定められている。なお、リフレクションウィークは、当該年次に履修した授業科目の成績評価ならびにTSSが出揃ってから、それを参考にして学生が省察と自己評価を行うために、1年次分は1年次の1、2月に、2年次分は翌3年次4月に、

\*兵庫教育大学特命助教（現・上越教育大学） \*\*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻

\*\*\*兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻

3 年次分は翌 4 年次 4 月に設定されている。4 年次分の学修成果シートは、4 年次の12月中旬から 1 月上旬頃に作成し、教職実践演習で活用される。カリキュラムマップや TSS は、学修成果シートの作成やリフレクションミーティングの際に活用される。活動記録は、学修成果シートを作成する際の根拠資料となるように年間を通して日々蓄積するように指導される。1, 2, 3 年次の11 月から12月にかけて、活動記録の利用促進を目的とした推奨期間（リフレクションフォローアップ）も設けられている。

兵庫教育大学と同様に、各大学において、多様性に富んだ教員養成スタンダードが策定され、運用に向けて試行錯誤がなされている。しかし、今日、教員養成スタンダードを導入することの意義が盛んに議論される反面（長谷川, 2013; 望月・村山, 2011）、各大学における教員養成スタンダードに関わる取組の効果や課題について実証的に検討された例は極めて少ない。教員養成スタンダードに関わる取組の効果を検証した数少ない研究として、鈴木（2012）がある。鈴木（2012）は、兵庫教育大学の教員養成スタンダードの運用が開始された2011（平成23）年度の10月に、学部 1 年次生に対してアンケート調査を実施し、教員養成スタンダードに関わる取組に関する意識や評価を尋ねた。その結果、教員養成スタンダードは、入学時のオリエンテーションに活用することで教職理解や動機づけの道具として役立ったこと、さらに、自己評価することによって教職理解や自己理解、学習計画の立案に役立ったことが明らかとなった。鈴木（2012）の研究において当時、1 年次であった学生は2015（平成27）年 3 月に卒業を迎えた。そこで、本研究では2015（平成27）1 月に兵庫教育大学の卒業を控えた段階で、再度、兵庫教育大学の教員養成スタンダードに基づく指導体制に関するアンケート調査を実施した。本研究の目的は、このアンケート調査の結果を考察することで、兵庫教育大学の教員養成スタンダードの運用、ひ

いては本邦の教員養成スタンダードの運用について考察することである。

## 方 法

兵庫教育大学の卒業を控えた 4 年次生146名（男性50 名、女性96名）を対象に、アンケート調査を行った。アンケートは2015年（平成27）1 月に実施された教職実践演習（まとめ）で配布し、その場で回答を求めた。配布にあたり、アンケートには、回答者の回答内容は集団データとして数量化され、個人が特定されないことが記載された。

アンケートの内容は、主に、①性別・所属コース（分野）・進路、②CanPass ノートの使用実態、③学修成果シートを作成することでできたこと、④活動記録を作成することでできたこと、⑤リフレクションミーティングに参加することでできたこと、⑥CanPass ノートを活用することで役立ったこと、⑦教員養成スタンダードについての意識・感想、⑧カリキュラムマップや TSS が役立ったこと、⑨自由記述（教員養成スタンダードや CanPass ノート、カリキュラムマップ等に関する感想や意見、改善すべき点）に関するものであった。使用した質問紙フォーマットを Appendix 1 に示す。

## 結 果

まず、問 2 の CanPass ノートの使用実態について、5 段階（年に 1 回～ほぼ毎日）に関する回答者の割合を図 2 に示した。その結果、ログイン数、入力数ともに年に 1 回、あるいは月に 1 回以下と回答した割合が多く、月に 1 回～週に 1 回以上の回答はほとんど見られなかった。そのため、学生の約半数は、各年度で義務づけられた学修成果シートの作成に取り組む際に CanPass ノートを使用するのみであったといえる。また、残り半数は、数か月に 1 回程度の間隔で、学修成果シートや活動記録の作成等に CanPass ノートを使用していたと考えられる。

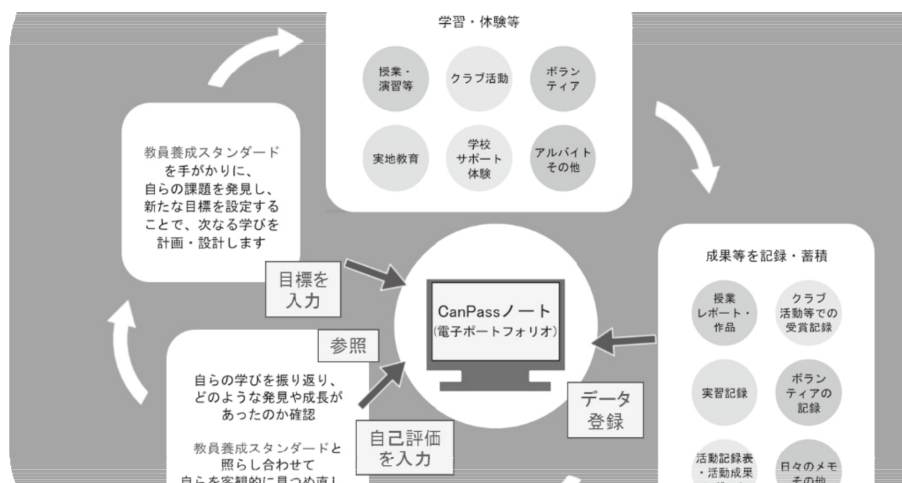


図1 兵庫教育大学の教員養成スタンダードを用いた学習サイクル

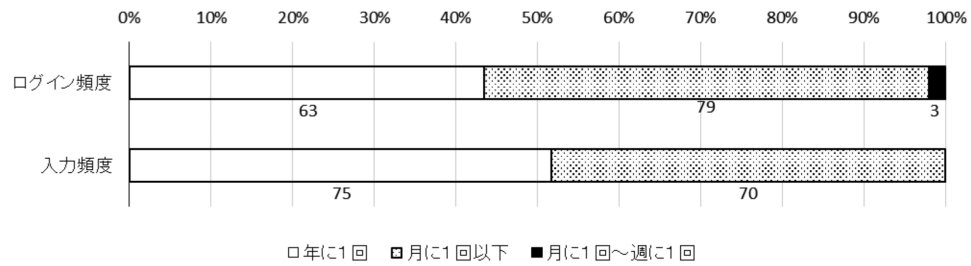


図2 CanPass ノートの利用状況

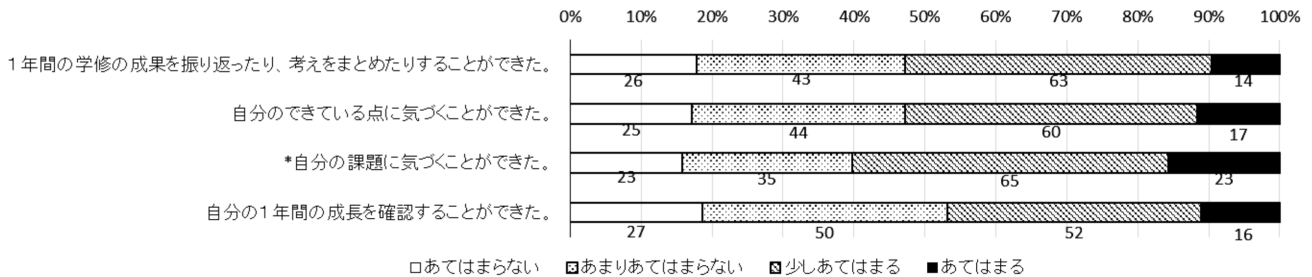


図3 学修成果シートに関する質問項目への回答者の割合

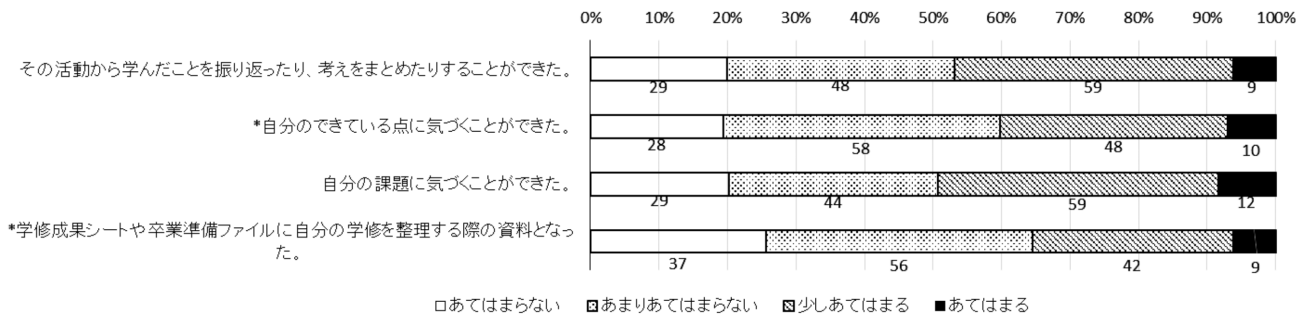


図4 活動記録に関する質問項目への回答者の割合

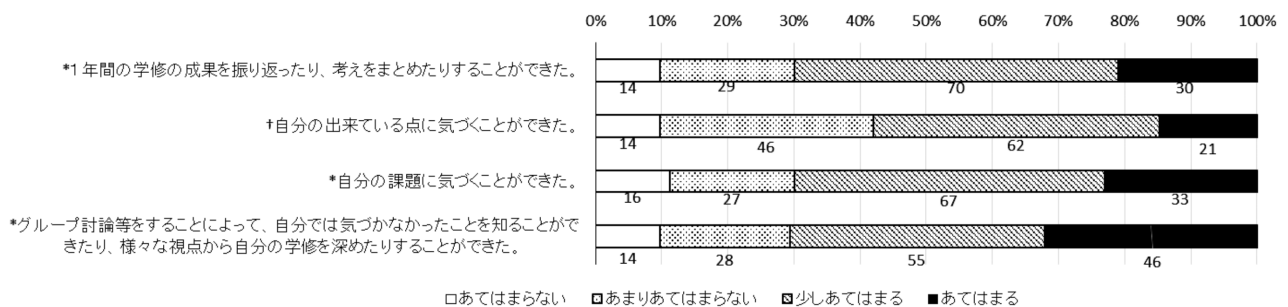


図5 リフレクションミーティングに関する質問項目への回答者の割合

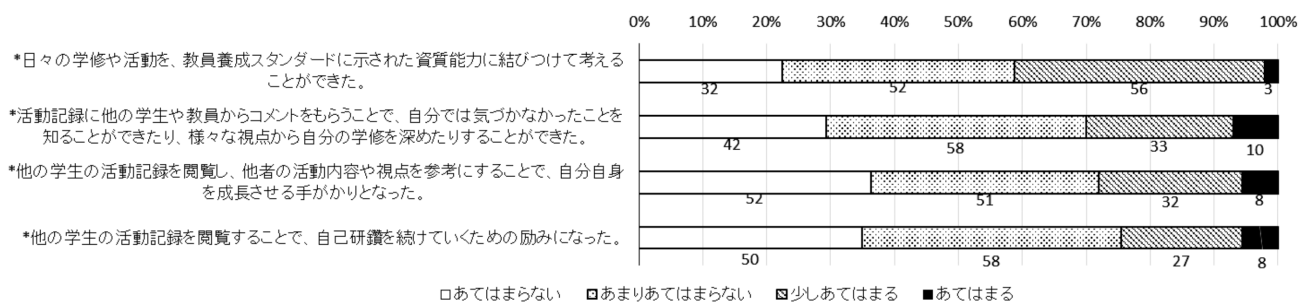


図6 CanPass ノートに関する質問項目への回答者の割合

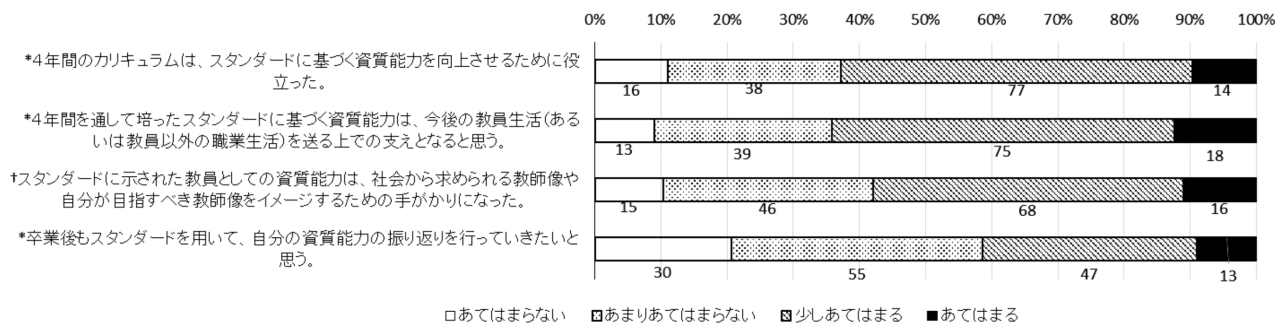


図7 教員養成スタンダードに関する質問項目への回答者の割合

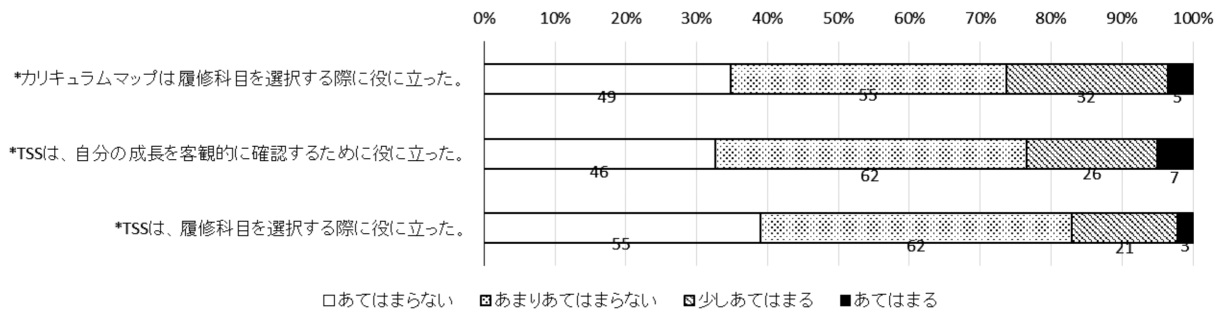


図8 カリキュラムマップとTSSに関する質問項目への回答者の割合

表1 CanPass ノートの利用頻度と各設問への回答の関連

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目1	項目2	項目3	項目4
ログイン頻度	.39**	.25**	.31**	.34**	.24**	.19*	.25**	.22**
入力頻度	.34**	.24**	.32**	.35**	.28**	.26**	.36**	.28**

問5 リフレクションミーティング				問6 CanPassノート			
項目1	項目2	項目3	項目4	項目1	項目2	項目3	項目4
ログイン頻度	.21*	.24**	.25**	.18*	.25**	.21*	.13
入力頻度	.25**	.27**	.34**	.25**	.29**	.19*	.13

問7 教員養成スタンダード				問8 カリキュラムマップとTSS		
項目1	項目2	項目3	項目4	項目1	項目2	項目3
ログイン頻度	.26**	0.14	.21*	.17*	.25**	0.15
入力頻度	.23**	0.14	.19*	0.14	.21*	.19*

note: \* $p < .05$ ; \*\* $p < .01$ 

次に、問3から問8までの各項目について、4段階評価（4 あてはまる～1 あてはまらない）に関する回答者の割合を図3～図8に示した。また、各項目への回答について、“4 あてはまる”と“3 少しあてはまる”の回答を肯定的評価、“2 あまりあてはまらない”、“1 あてはまらない”の回答を否定的評価として分類した。その上で、肯定的評価と否定的評価の回答者の割合を、正確二項検定を用いて比較した。図中の\*は有意差、†は有意傾向が見られた項目を示している。

問3の学修成果シートに関する各項目の回答者の割合は、図3の通りである。正確二項検定の結果、肯定的評価と否定的評価の間に統計学的に有意な差が見られた項目は、項目3の“自分の課題に気づくことができた”であった。項目3では、多くの回答者が肯定的評価を示した。

問4の活動記録に関する各項目の回答者の割合は、図4の通りである。正確二項検定の結果、肯定的評価と否定的評価の間に有意差が見られた項目は、項目2の“自分のできている点に気づくことができた”と項目4の“学修成果シートや卒業準備ファイルに自分の学修を整理する際の根拠資料となった”であった。これらの項目では、多くの回答者が否定的評価を示した。

問5のリフレクションミーティングに関する各項目の回答者の割合は、図5の通りである。正確二項検定の結果、リフレクションミーティングに関する全ての項目において、肯定的評価と否定的評価の間に有意差、あるいは有意傾向が見られた。なお、有意傾向の項目は、項目2のみであった。これらの項目では、多くの回答者が肯定的評価を示した。

問6のCanPassノートに関する各項目の回答者の割合

は、図6の通りである。正確二項検定の結果、CanPassノートに関する全ての項目において、肯定的評価と否定的評価の間に有意差が見られた。これらの項目では、多くの回答者が否定的評価を示した。

問7の教員養成スタンダードに関する各項目の回答者の割合は、図7の通りである。正確二項検定の結果、CanPassノートに関する全ての項目において、肯定的評価と否定的評価の間に有意差、あるいは有意傾向が見られた。項目1の“4年間のカリキュラムは、スタンダードに基づく資質能力を向上させるために役立った”、項目2の“4年間を通して培ったスタンダードに基づく資質能力は、今後の教員生活（あるいは教員以外の職業生活）を送る上での支えとなると思う”、項目3の“スタンダードに示された教員としての資質能力は、社会から求められる教師像や自分が目指すべき教師像をイメージするための手がかりになった”では、多くの回答者が肯定的評価を示した。一方で、項目4の“卒業後もスタンダードを用いて、自分の資質能力の振り返りを行っていきたいと思う”については、多くの回答者が否定的評価を示した。なお、有意傾向の項目は、項目3のみであった。

問8のカリキュラムマップやTSSに関する各項目の回答者の割合は、図8の通りである。正確二項検定の結果、カリキュラムマップやTSSに関する全ての項目において、肯定的評価と否定的評価の間に有意差が見られた。これらの項目では、多くの回答者が否定的評価を示した。

次に、CanPassノートの使用実態と各設問への回答の傾向の関連性を検討するために、a) CanPassノートへのログイン頻度、b) CanPassノートへの入力頻度（年に1回～ほぼ毎日）と問3～問8の各項目への回答（あてはまらない～あてはまるの4段階）との関連分析を行った。分析には、Spearmanの順位相関を用いた。相関分析の結果、ログイン頻度や入力頻度は、多くの項目と有意な正の相関を示した。したがって、CanPassノートの利用頻度が多い回答者ほど、各設問に対して高い評価を示していることが明らかとなった。特に、学修成果シートを用いた振り返りや課題の明確化、自己の成長の確認（項目1, 3, 4）、活動記録やリフレクションミーティングによる課題の明確化（項目3）との間に、 $r=.30$ を超える相関（弱い相関）を示した。

また、問9の自由記述では、主に、教員養成スタンダードが役立った点、項目数や項目内容に関する意見、カリキュラムマップやTSSに関する意見が挙げられた。教員養成スタンダードが役立った点は、“1年に1度書くことで、1年前の自分の姿をみることができた。目標についても改めて考えることができ、目指すところが見えた。”、“振り返りができたので良かった。”などであった。項目数や項目内容に関する意見は、“少し入力する項目が多く、使い方もよくわかりづらかったです。活用例などがもっとあったら、意欲的に取り組めたかなと思います。”、“CanPassノートの項目内容を改善すべき

だと思います。1, 2, 3回生には難しすぎる。卒業を迎えた4回生には答えやすいと思います。”などであった。カリキュラムマップやTSSに関する意見は、“TSSが何かよく分からなかった。”、“カリキュラムマップが何か分からない。”などであった。

## 考 察

本研究の結果、問3、問5、問7では概ね肯定的評価が見られた反面、問4、問6、問8では否定的評価が見られた。肯定的評価が見られた設問は、教員養成スタンダードを用いた自己評価（学修成果シートの作成）、自己評価を用いたリフレクション（リフレクションミーティング）、教員養成スタンダードに関する支援体制に関するものであった。一方で、否定的評価が見られた設問は、活動記録、CanPassノート、カリキュラムマップやTSSに関するものであった。したがって、全体的傾向として、教員養成スタンダードの導入についてはその効果が得られている反面、教員養成スタンダードの運用を補助する仕組み（eポートフォリオやカリキュラムマップ、TSS）については十分な効果が得られていないことが示唆される。

教員養成スタンダードの自己評価は、自己の課題を発見するために役立つことが示唆された。さらに、リフレクションミーティングと呼ばれるグループ討議や全体討議が、学修成果を省察し、他者評価を受けて学修をより深める機会となっていることが明らかとなった。したがって、自己評価のみでは振り返りが不十分な場合もあるが、他者と共有し、他者の視点を踏まえることで、学修を深めることができると考えられる。自由記述においても、“1年に1度書くことで、1年前の自分の姿をみることができた。目標についても改めて考えることができ、目指すところが見えた。”などの感想が寄せられており、教員養成スタンダードは、自己の成長を確認し、課題を発見するツールとして機能していることが伺える。一方で、教員養成スタンダードを用いた自己評価の取組が、「欠点探し」にならないように注意する必要があるだろう。教員養成スタンダードの項目は、低年次生には内容が理解しにくく、また各自の実習経験が少なく実感が伴わないことがある（別惣, 2013）。本研究においても、同様の指摘が自由記述にも複数寄せられた。項目内容が高い要求水準を示している場合には、回答者にとって「欠点探し」に陥りやすいだろう。そのため、同級生や指導教員からの客観的な評価が得られるリフレクションミーティングは、教員養成スタンダードの適切な運用において重要な役割を果たしていると考えられる。また、著しく理解度の低い項目については今後リストアップし、項目内容を修正することも視野に入れる必要があるだろう。あるいは、各学年において50項目を全て回答させるのではなく、学年に応じて答えるべき項目を精選するなどの対応も求められる（別惣, 2013）。

教員養成スタンダードを用いた自己評価の取り組みは、教職理解や自己理解、学習計画の立案に役立つことが期

待される反面（別惣，2013），「学んだことをただ表現すればいい」，「基準に到達すればいい」といった意識に繋がり，学びが受身的になる可能性も指摘されている（小柳・久田・湯浅，2014，pp.27）。したがって，教員養成スタンダードの運用にあたって，いかに学生の動機づけを阻害せず，学びを深めることに繋げるかが大きな論点となるだろう。能動的な学習の動機づけの向上には，自律性，有能性，関係性への欲求が関与すると考えられている（Ryan & Deci, 2000）。自律性への欲求とは自分自身で行動を選択し，行動したいという欲求である。有能性への欲求は，自分自身の有能さを確認したいという欲求である。関係性への欲求は，他者とのつながりを感じ，他者から大切にされたり，認められたりすることへの欲求である。教員養成スタンダードの運用に当たっても，これらの欲求への働きかけを意識することで，学生の自律的な学習に繋げていくことが可能であると考えられる。

まず，自律性への働きかけの例として，目標を自己決定させることが挙げられる。兵庫教育大学の教員養成スタンダードに基づく年間指導計画では，既に，年度初めにeポートフォリオ上で年度目標を記入するように定められている。しかし，現行の指導体制では目標の記入はあくまで任意であり，十分な利用と成果が得られていないのが実情である。そのため，今後はこれまで以上に目標の記入を促進する仕組みを構築していくことが課題となる。例えば，教員養成スタンダードの項目のうち自身が優先的に育みたい項目を自ら選択し，目標を設定させるなど，より自律性に配慮する工夫が求められる。加えて，兵庫教育大学では，学生が自律的に目標設定と科目選択を行う判断材料として，カリキュラムマップやTSSが設置されている。これまで，カリキュラムマップとTSSについては情報提供面での不足があった。その背景には，教員養成スタンダードとeポートフォリオの導入にあたり，教員養成スタンダードやeポートフォリオに関する基本的理解を学内に浸透させることに重点が置かれていたことがある。今後はカリキュラムマップとTSSに関する情報提供を徐々に充実させ，活用を促していく必要があるだろう。

次に，有能性や関係性への働きかけについては，既に論じた通り，リフレクションミーティングに関する設問において，“自分の出来ている点に気づくことができる”，“グループ討論等をすることによって，自分では気づかなかったことを知ることができたり，様々な視点から学修を深めたりすることができる”などの効果が得られており，リフレクションミーティングがその役割を担っていることが分かる。教師は，日々の実践と省察の繰り返しや他者との相互作用の中で熟達すると考えられている（坂本，2007）。リフレクションミーティングは，他者と協同して省察する機会を提供し，関係性への働きかけを担うものであると言えるだろう。加えて，eポートフォリオもまた，他者との交流や相互評価の場となり，関係性への欲求にアプローチするものとして捉えることがで

きる。しかし，本調査では，活動記録やCanPassノートに関する問いでは否定的評価が多く得られた。また，問2のログイン頻度や入力頻度も，年に1回～月に1回以下の回答が高い割合を示していた。そのため，現状では，eポートフォリオ上でのコミュニケーションが活発化しておらず，eポートフォリオを用いて活動記録を作成することの利点を学生が十分に感じられていない可能性がある。eポートフォリオの利用を活性化するための対策については，別惣（2013）により，すでに議論されている。すなわち，活動記録を蓄積することの重要性を学生に周知するとともに，各授業科目との連携を強化し，CanPassノートを授業で利用する仕組みを構築していくことが必要である（別惣，2013）。また，諸外国では，ポートフォリオを用いた指導を完全に授業科目と対応させている事例も見受けられる（岩田・松浦・角屋・吉田，2010）。そのため，兵庫教育大学では，CanPassノートの導入以降，学生や授業担当教員を対象にした説明会の拡充と洗練が進められてきた。これらの取組の成果については，平成27年度以降の卒業生への調査結果に期待したい。

以上のような課題や要望を踏まえても，問7の「大学の教員養成スタンダードを基盤とした指導体制」に関する問いのうち，3つの項目で肯定的評価が得られたことは注目すべきである。具体的には，“4年間のカリキュラムは，スタンダードに基づく資質能力を向上させるために役立った。”，“4年間を通して培ったスタンダードに基づく資質能力は，今後の教員生活（あるいは教員以外の職業生活）を送る上での支えとなると思う。”，“スタンダードに示された教員としての資質能力は，社会から求められる教師像や自分が目指すべき教師像をイメージするための手がかりになった。”といった項目であった。この結果から，教員養成スタンダードに基づく教育体制から，十分な教育的効果が得られたと考えられる。また，注目すべき点として，本研究の結果，CanPassノートの利用頻度が多い学生ほど，多くの問いに肯定的評価を示した。具体的には，学修成果シートを作成することによる省察や課題の明確化，自己の成長の確認といった項目や，活動記録の作成やリフレクションミーティングによる課題の明確化といった項目において，有意な相関がみられた。この結果の背景として学生のパーソナリティ要因（勤勉性や社会的望ましさなど）を考慮する必要はあるものの，一部の学生は，日々の活動記録の蓄積を自主的に行っているほど，教員養成スタンダードに基づく教育からより深い学びを得ている可能性がある。したがって，兵庫教育大学のCanPassノートシステムの可能性について，一定の評価が可能であるだろう。そもそも，eポートフォリオとはツールにすぎず，eポートフォリオを機能させるためには，実際にどのような活用をするかが重点となる。そのため，学生の使用を促す仕掛けを整備していくこと必要である。eポートフォリオの目に見える効果が生じるには時間を要することから（森本，2011），今後も，eポートフォリオの利用実態や

効果の検証を継続しつつ、eポートフォリオを自律的な学習のツールとして効果的に運用するための支援体制を改善、構築していく必要があるだろう。

まとめとして、本研究の結果、兵庫教育大学の教員養成スタンダードに基づく全学的な教育体制に関して、4年間の指導を受けた学生への効果と今後取り組むべき課題が明らかとなった。教員の質保証への社会的要請に伴い、近年多くの大学の教員養成課程で、教員養成スタンダードやeポートフォリオが導入されてきた。その一方で、教員養成スタンダードやeポートフォリオといったツールが、いかに学生の教員としての資質能力の向上に繋がっているかという点についてはいまだ検討が不十分であり、効果的な運用に向けた多くの課題が残されている。また、「教員養成スタンダードが自律的な教員の資質能力を高める手立てとなりうるのか」という点について疑問視されることもある（長谷川・黒田、2015; 日本教育大学協会、2008）。これらの点について、本研究は、兵庫教育大学の教員養成スタンダードに関する取組を事例として一定の効果と課題を明らかにした点において、大きな意義を持つだろう。

最後に、本研究の限界点として、本研究の結果は学生からの主観的な報告のみに基づくものであった。今後の研究では、4年間を通じた教員養成スタンダードの自己評価の成長度合い、4年間の教員養成スタンダードの成長と客観的成果（教員採用試験の合格率など）との関連、4年間の成長とCanPassノートの活用状況との関連など、より多面的に教員養成スタンダードに基づく教育体制を評価していく必要があるだろう。

## 引用文献

- 別惣淳二（2012）. 序章 研究の目的—教員養成スタンダードによる教員の質保証の必要性和具体的な取り組みの概要— 別惣淳二・渡邊隆信（編）国立大学法人兵庫教育大学教育実践学叢書 1 教員養成スタンダードに基づく教員の質保証—学生の自己成長を促す全学的学習支援体制の構築— ジアース教育新社, 10-27.
- 別惣淳二（2013）. 教員養成の質保証に向けた教員養成スタンダードの導入の意義と課題: 兵庫教育大学の事例をもとに（＜特集＞教師教育改革）教育學研究, 80, 4号, 439-452.
- 中央教育審議会（2005）. 新しい時代の義務教育を創造する, 中央教育審議会答申
- 長谷川哲也（2013）. 「教員に必要とされる資質能力」に基づくスタンダードの予備的考察—各種審議会の議論や先行事例の検討を通じて— 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 21, 121-130.
- 長谷川哲也・黒田友紀（2015）. 米国のスタンダードにもとづく教員養成プログラムとその運用について—パフォーマンス評価の展開と課題— 日本教育大学協会研究年報, 33, 33-50.
- 岩田昌太郎・松浦伸和・角屋重樹・吉田裕久（2010）. フィンランドの教員養成における質保証の実態—ユバスキュラ大学のポートフォリオを事例として— 学校教育実践学研究, 16, 117-126.
- 教育職員養成審議会（1997）. 新たな時代に向けた教員養成の改善方策について, 教育職員養成審議会・第1次答申
- 小柳和喜雄・久田敏彦・湯浅恭正（2014）. 新教師論—学校の現代的課題に挑む教師力とは何か— ミネルヴァ書房
- 望月耕太・村山 功（2011）. 教員養成系大学・学部に求められる教育の到達目標の策定教員養成教育に関する質保証を通して— 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 19, 151-157.
- 森本康彦（2011）. 高等教育における e ポートフォリオの最前線（＜特集＞ICT を活用した教育・学習支援のトレンド） システム制御情報学会誌, 55, 425-431.
- 日本教育大学協会（2008）. 学部教員養成教育の到達目標の検討（報告） 日本教育大学協会「学部教員養成教育の到達目標検討」プロジェクト ([http://www.jaue.jp/\\_src/sc760/no\\_59.pdf](http://www.jaue.jp/_src/sc760/no_59.pdf))
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American psychologist*, 55, 68-78.
- 坂本篤史（2007）. 現職教師は授業経験から如何に学ぶか 教育心理学研究, 55, 584-596.
- 鈴木 篤（2012）. 第4章 スタンダード導入後の教員養成についての学生の意識 別惣淳二・渡邊隆信（編）国立大学法人兵庫教育大学教育実践学叢書 1 教員養成スタンダードに基づく教員の質保証—学生の自己成長を促す全学的学習支援体制の構築— ジアース教育新社, 148-173.

## 兵庫教育大学の教員養成スタンダードに関するアンケート

本学では、学士課程を通して養成する「教員の資質能力」を、50項目の兵庫教育大学教員養成スタンダードとして設定し、各学年のまとめ・振り返り(リフレクションミーティング)に活用しています。また、その一環として、CanPassノートを用いて日々の活動を記録し、振り返りの根拠資料として活用することを推奨しています。

本調査は、教員養成スタンダードとCanPassノートについての感想・意見をお尋ねするものです。回答内容は集団データとして数値化され、個人が特定されることはありませんので、安心してお答えください。

## 問1 当てはまる数字に○をつけて下さい。

性別:	1. 男 2. 女
コース・分野:	1.学校教育 2.幼教育 3.学校心理 4.国語 5.英語 6.社会 7.数学 8.理科 9.音楽 10.美術 11.保健体育 12.家庭 13.総合学習
卒業後の 予定進路:	1.保育士・幼稚園教員 2.小学校教員 3.中学校教員 4.高校教員 5.特別支援学校教員 6.その他教育関連( ) 7.その他( )

## 問2 CanPassノートの使用実態について答えてください。当てはまる箇所を1つ選んで○を付けて下さい。

a) 在学中どの程度、CanPassノートにログイン、閲覧していましたか？	年に1回 ・ 月に1回以下 ・ 月に1回～週に1回 ・ 週に1回以上 ・ ほぼ毎日
b) 在学中どの程度、CanPassノートに入力していましたか？	年に1回 ・ 月に1回以下 ・ 月に1回～週に1回 ・ 週に1回以上 ・ ほぼ毎日

## 問3 学修成果シート(教員養成スタンダードの自己評価)を作成することで、どのようなことができましたか？ それぞれ、最も近い数字を1つ選んで○をつけて下さい。

		あてはまる	あてはまる少し	あてはまるあまり	あてはまるあまり
1	1年間の学修の成果を振り返ったり、考えをまとめたりすることができた。	4	3	2	1
2	自分のできている点に気づくことができた。	4	3	2	1
3	自分の課題に気づくことができた。	4	3	2	1
4	自分の1年間の成長を確認することができた。	4	3	2	1

## 問4 活動記録を作成することで、どのようなことができましたか？ それぞれ、最も近い数字を1つ選んで○をつけて下さい。

		あてはまる	あてはまる少し	あてはまるあまり	あてはまるあまり
1	その活動から学んだことを振り返ったり、考えをまとめたりすることができた。	4	3	2	1
2	自分のできている点に気づくことができた。	4	3	2	1
3	自分の課題に気づくことができた。	4	3	2	1
4	学修成果シートや卒業準備ファイルに自分の学修を整理する際の資料となった。	4	3	2	1

## 問5 リフレクションミーティングによって、どのようなことができましたか？ それぞれ、最も近い数字を1つ選んで○をつけて下さい。

		あてはまる	あてはまる少し	あてはまるあまり	あてはまるあまり
1	1年間の学修の成果を振り返ったり、考えをまとめたりすることができた。	4	3	2	1
2	自分の出来ている点に気づくことができた。	4	3	2	1
3	自分の課題に気づくことができた。	4	3	2	1
4	グループ討論等を行うことによって、自分では気づかなかったことを知ることができたり、様々な視点から自分の学修を深めたりすることができた。	4	3	2	1

問6 CanPassノートを活用することは、どのようなことに役立ちましたか？  
それぞれ、最も近い数字を1つ選んで○をつけて下さい。

		あてはまる	あてはまる	少しあてはまらない	あまりあてはまらない
1	日々の学修や活動を、教員養成スタンダードに示された資質能力に結びつけて考えることができた。	4	3	2	1
2	活動記録に他の学生や教員からコメントをもらうことで、自分では気づかなかったことを知ることができたり、様々な視点から自分の学修を深めたりすることができた。	4	3	2	1
3	他の学生の活動記録を閲覧し、他者の活動内容や視点を参考にすることで、自分自身を成長させる手がかりとなった。	4	3	2	1
4	他の学生の活動記録を閲覧することで、自己研鑽を続けていくための励みになった。	4	3	2	1

問7 本学の教員養成スタンダードについて、どのように思いますか？  
それぞれ、最も近い数字を1つ選んで○をつけて下さい。

		あてはまる	あてはまる	少しあてはまらない	あまりあてはまらない
1	4年間のカリキュラムは、スタンダードに基づく資質能力を向上させるために役立った。	4	3	2	1
2	4年間を通して培ったスタンダードに基づく資質能力は、今後の教員生活（あるいは教員以外の職業生活）を送る上での支えとなると思う。	4	3	2	1
3	スタンダードに示された教員としての資質能力は、社会から求められる教師像や自分が目指すべき教師像をイメージするための手がかりになった。	4	3	2	1
4	卒業後もスタンダードを用いて、自分の資質能力の振り返りを行っていききたいと思う。	4	3	2	1

問8 カリキュラムマップやTSS（カリキュラムマップに基づいたスタンダード・スコア）は、どのように役立ちましたか？  
それぞれ、最も近い数字を1つ選んで○をつけて下さい。

		あてはまる	あてはまる	少しあてはまらない	あまりあてはまらない
1	カリキュラムマップは履修科目を選択する際に役に立った。	4	3	2	1
2	TSSは、自分の成長を客観的に確認するために役に立った。	4	3	2	1
3	TSSは、履修科目を選択する際に役に立った。	4	3	2	1

問9 本学の教員養成スタンダードやCanPassノート、カリキュラムマップ等について、あなたの感想や意見、改善すべき点を自由に記入してください。